

「グローバルCOEプログラム」(平成19年度採択拠点)事業結果報告書

概要

| | | | | | |
|---------------------------------------|--|-------------------------------|--|------|-----|
| 機関名 | 立命館大学 | 機関番号 | 34315 | 拠点番号 | D11 |
| 1. 機関の代表者 (学長) | (ふりがなくローマ字) (氏名) kawaguchi kiyofumi 川口 清史 | | | | |
| 2. 申請分野 (該当するものに〇印) | A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域> | | | | |
| 3. 拠点のプログラム名称 (英訳名) | 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 (Digital Humanities Center for Japanese Arts and Cultures) | | | | |
| 研究分野及びキーワード | <研究分野: 史学>(日本文化)(京都)(Web技術)(GIS)(デジタルアーカイブ) | | | | |
| 4. 専攻等名 | アート・リサーチセンター、文学研究科人文学専攻、理工学研究科総合理工学専攻、 先端総合学術研究科先端総合学術専攻、政策科学研究科政策科学専攻、 映像研究科映像専攻(平成23年4月1日追加) | | | | |
| 5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合) | ロンドン大学SOAS | | | | |
| 6. 事業推進担当者 | 計 24 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合[100%] | | | | |
| ふりがなくローマ字 氏名(年齢) | 所属部局(専攻等)・職名 | 現在の専門 学位 | 役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項) | | |
| (拠点点リーダー) Akama Ryo 赤間 亮 (51) | 先端総合学術研究科先端総合学術専攻・教授(平成20年3月31日迄) 文学研究科人文学専攻・教授(平成20年4月1日から) | 日本芸能史 文学修士 | 【全体統括・日本文化研究班統括】 デジタルアーカイブ、日本芸能史研究 | | |
| Wada Seigo 和田 晴吾 (64) | 文学研究科人文学専攻・教授 | 日本考古学 文学修士 | 考古学・文化財アーカイブと研究 | | |
| John Carpenter John Carpenter (54) | ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院 人文・文化学部 芸術 ・考古学科・准教授 / 衣笠総合研究機構・特別招聘教授 | 日本美術文化史 Ph.D | 日本美術史研究 (海外連携担当(ヨーロッパ・北アメリカ)) | | |
| Kimura Kazuaki 木村 一信 (65) | 文学研究科人文学専攻・教授(平成21年3月31日迄) 衣笠総合研究機構・特別招聘教授(平成21年4月1日から) | 日本文学 博士(文学) | 日本文学コーパス、日本文学交流史 (海外連携担当(アジア)) | | |
| Furukawa Kohei 古川 耕平 (36) | 映像学部・講師(平成21年3月31日迄) 映像研究科映像専攻・准教授(平成21年4月1日から) | CG 博士(工学) | (平成20年3月19日追加) 有形・無形文化財のデジタル化、教育用マルチメディアシステム研究 | | |
| Kidachi Masaaki 木立 雅朗 (51) | 文学研究科人文学専攻・教授 | 日本考古学 文学士 | 【京都文化研究班統括】 近世・近現代考古学コンテンツ研究 | | |
| Sughashi Takao 杉橋 隆夫 (65) | 文学研究科人文学専攻・教授 | 日本史学 博士(文学) | 平安・中世史資料アーカイブと研究 | | |
| Tomita Mika 富田 美香 (45) | 文学研究科人文学専攻・准教授(平成23年3月31日迄) 映像研究科映像専攻・准教授(平成23年4月1日から) | 日本映画史 文学修士 | 映画史研究、京都映画アーカイブ | | |
| Kawahara Masao 川嶋 将生 (69) | 文学研究科人文学専攻・教授(平成21年3月19日迄) 衣笠総合研究機構・特別招聘教授(平成23年4月1日から) | 日本中世史 博士(文学) | 【全体統括】中近世芸能文化史の研究(平成21年3月26日迄) 中近世芸能文化史の研究(平成23年4月1日から) | | |
| Matsumoto Ikuo 松本 都代 (37) | 衣笠総合研究機構・特別招聘准教授 | 日本中世、日本文学 博士(文学) | (平成21年3月26日追加) 洛中洛外図屏風の総合的アーカイブと都市風俗の変遷 | | |
| Yano Keiji 矢野 桂司 (50) | 文学研究科人文学専攻・教授 | 地理情報科学 博士(理学) | 【歴史地理情報研究班統括】 京都・歴史地理情報研究 | | |
| Nakaya Tomoki 中谷 友樹 (42) | 文学研究科人文学専攻・准教授 | 地理情報科学 博士(理学) | バーチャル時・空間の構築 | | |
| Kawasumi Tatsuzori 河角 龍典 (40) | 文学部人文学科・講師(平成21年3月31日迄) 文学部人文学科・准教授(平成21年4月1日から) | 環境考古学 博士(文学) | 京都・歴史地理情報研究 | | |
| Kijanda Akihito 金田 章裕 (65) | 衣笠総合研究機構・特別招聘教授 | 人文地理学 博士(文学) | 京都学、歴史地理学 (国内連携担当) | | |
| Tanaka Satoshi 田中 覚 (52) | 理工学研究科総合理工学専攻・教授 | 3次元CG 理学博士 | (平成20年7月4日追加) 可視化、シミュレーション | | |
| Hachimura Kozaburo 八村 広三郎 (63) | 理工学研究科総合理工学専攻・教授 | 画像情報学 工学博士 | 【デジタルアーカイブ技術研究班統括】 舞踊のアーカイブ、画像・映像処理 | | |
| Ruck Thawonmas Ruck Thawonmas (46) | 理工学研究科総合理工学専攻・教授 | 人工知能 博士(工学) | 歴史・文化情報の可視化、 バーチャル時・空間情報技術 | | |
| Yamashita Yoichi 山下 洋一 (52) | 理工学研究科総合理工学専攻・教授 | 音声情報処理 博士(工学) | 音楽情報のアーカイブと解析、 音響情報の処理 | | |
| Maeda Akira 前田 亮 (40) | 理工学研究科総合理工学専攻・准教授(平成23年3月31日迄) 理工学研究科総合理工学専攻・教授(平成23年4月1日から) | 多言語情報処理 博士(工学) | デジタル図書館、歴史史料・日本文学コーパス、 データベース横断検索 | | |
| Tanaka Hiromi 田中 弘美 (60) | 理工学研究科総合理工学専攻・教授 | コンピュータビジョン 工学博士 | (平成20年7月4日追加) 仮想空間の構成 | | |
| Inaba Mitsuyuki 稲葉 光行 (47) | 政策科学研究科政策科学専攻・教授 | ソフトウェア工学 Master of Science | 【Web活用技術研究班統括】 Webコミュニティシステム | | |
| Hosoi Koichi 細井 浩一 (53) | 政策科学研究科政策科学専攻・教授(平成23年3月31日迄) 映像研究科映像専攻・教授(平成23年4月1日から) | デジタルコンテンツ産業論 博士(経営学) | 映像・ゲームアーカイブ | | |
| Uemura Masayuki 上村 雅之 (68) | 先端総合学術研究科先端総合学術専攻・教授 | 電子工学 工学士 | (平成20年3月19日追加) ビデオゲームプレイ実態アーカイブの技法開発と分析 | | |
| Nakamura Akinori 中村 彰憲 (42) | 政策科学研究科政策科学専攻・教授(平成23年3月31日迄) 映像研究科映像専攻・教授(平成23年4月1日から) | 組織論・経営戦略 博士(学術) | (平成21年3月26日追加) ゲームアーカイブの国際連携 | | |

(機関名: 立命館大学 拠点のプログラム名称: 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点)

| | |
|--|---------------------------------|
| 機関（連携先機関）名 | 立命館大学、ロンドン大学SOAS |
| 拠点のプログラム名称 | 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 |
| 中核となる専攻等名 | アート・リサーチセンター |
| 事業推進担当者 | （拠点リーダー）赤間 亮・文学研究科人文学専攻 教授 外23名 |
| <p>[拠点形成の目的]</p> <p>本拠点は人文学と情報技術の連携に基づくデジタル・ヒューマニティーズ(DH)の方法によって日本文化研究を革新するとともに、その中核を担う研究者の育成を目標とする。人文学の分野でも日常的なコンピュータをはじめとする情報技術の活用が始まって久しいが、いまだ十分な活用がなされておらず、実用的な研究基盤の形成に至っていない。本拠点では、21世紀COEプログラム以来の蓄積を一步進め、現在海外で唱えられているDHのさらなる進化形として、Web技術を活用したマルチメディア型DB、地理情報システム(GIS)、先端的情報技術を核とするDHを世界に提案する。世界レベルのネットワーク型、プロジェクト型の研究の展開を通して、日本文化研究の世界的人材育成のための教育研究拠点を歴史文化都市京都に形成する。</p> <p>【教育面】本拠点は、DHの枠組を体系化しながら、日本文化・教育研究の革新を企図している。育成するのは、国内でのDH教育・研究の役割を担い、海外の拠点と連携・協力ができる人材、デジタルアーカイブされた情報を駆使しつつ海外の日本文化研究の動向を理解し、世界規模でリーダーシップの取れる人材である。</p> <p>【研究面】歴史都市京都を核とした日本文化・芸術コンテンツを対象に、DHの手法や考え方に基づいて、人文学研究のさらなる深化を図る。先端的情報技術を最大限に活用して、有機的な日本文化・芸術コンテンツの公開・共有・活用を実践し、世界における「日本文化・芸術の研究ポータル」としての役割を担う。</p> <p>[拠点形成計画及び達成状況の概要]</p> <p>【教育面】平成23年には、本プログラムのベースであるアート・リサーチセンター(ARC)を、本学の恒常的教育機能を持つ研究所に改編した。また、本プログラムで蓄積してきた教育・研究の資産を継承する後継大学院の設立が全学のバックアップの下、組織的に進行しており、平成26年度に本学文学研究科内に文化情報学専攻(仮称)が設置されることが決定している。さらに平成24年度文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」へ「日本文化情報キュレーション人材育成プログラム」として公募申請を行った。プロジェクト参加型(体験型)教育システムが定着し、テーマ設定型博士課程後期課程大学院生や若手研究者の公募により、プロジェクト型研究集団へと展開し、多大な成果をあげた。研究科横断型かつ公開型、バイリンガルの「日本文化DH教育プログラム」を平成20年度から実施し、受講者には社会人・修士課程の学生をも取込んだ。データベースやデジタルアーカイブ、GIS、Web環境など、DHの手法を縦横に駆使できる若手研究者が、技術的な情報交換をしながら自身の専門の研究方法を向上させる姿が定着してきた。日本学術振興会「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)」や「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の採択を受け、海外の大学・研究所・博物館での若手研究者の研究・研修活動を強力に推進した。また、国際学術会議などでの研究発表・英文の学術論文執筆をきめ細かく支援し、その結果、プログラム初年度(平成19年度)4件であった国際学術会議での発表は、22年度には54件に激増した。さらに毎年、海外の「日本文化」研究者(長期滞在)を客員研究員として数名受け入れるなど、着実に日本研究のグローバル・ハブとしての機能を果たしている。結果、プログラム期間中に、21名の博士号取得者を輩出した。</p> <p>【研究面】文化資源のデジタルアーカイブ活動の中に実践研究の場を設定し、Web2.0技術に基づく動的なDBの開発により、人文学研究の深化を進める手法を確立した。さらに、テキスト処理主体の世界のDHの動向に対し、マルチメディア型DHという新たな日本型DHの考え方を提案した。ARCモデルとして、世界的に高く評価されている本拠点のデジタルアーカイブやデジタルアーカイビングの技術をもとに、国内外の美術館・博物館・個人の所蔵する資料・作品のデジタルアーカイブ化を継続的に行った。これにより、世界に散在している日本文化・芸術コンテンツのデジタル資源共有化と活用を世界レベルで推進した。また、この研究プロジェクトのための共同作業を通じて、世界有数の美術館や博物館(ボストン美術館や大英博物館を含む)との研究ネットワークを構築した。文書・画像・音声・動画・身体動作データなどの異なるフォーマットや異分野のコンテンツを統合し、他機関のDBも連動させた関連付けを実現した。システム研究とコンテンツ研究、質と量とのバランスのとれた研究の推進が課題となるが、人文学の新しい分野を着実に切り開いている。GISは、歴史地理学のツールとして有効に機能し、文化・芸術コンテンツの時・空間上での可視化のプラットフォームとして効果を発揮し、特に歴史GIS バーチャル京都は、祇園祭関連の有形・無形コンテンツのデジタル化と活用・公開をはじめ、様々な研究の統合プラットフォームとして、研究とその社会還元利用されている。さらに、Web2.0などの双方向型ネットワーク基盤の形成によって、情報の共有・公開・活用、研究交流の基盤としての研究ポータル化に成功した。2次元資料(屏風や地図、浮世絵、版本)の他、3次元資料(版木、陶磁器、漆器)のDB、舞踊などの身体動作の記録・分析、様々な文化財の立体形状解析など、デジタルアーカイブ技術と人文学研究の連携が効果的な分野において、独自の研究成果が多数生れている。</p> | |

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

1) 日本文化研究に関するハブ機能の展開

本拠点が持つ国際的ネットワーク、ならびにデジタル技術を効果的に活用することで、資源の世界規模の共有化を可能とし、本学の国際展開に貢献するとともに、京都の地に、新たな日本芸術文化デジタル資源キャピタル、集積拠点を形成した。グローバルCOEプログラム採択以前の、21世紀COEプログラム(平成14~18年度)段階において、すでに国内トップレベルを誇る浮世絵のデジタルアーカイブを構築していたが、グローバルCOEプログラムにおいては、**欧米の博物館・美術館に散在する研究資源のデジタル撮影とその調査**を本格的に展開した。アート・リサーチセンター(ARC)に所属するメンバーは、高度なデジタルアーカイブ技術を身につけており、デジタル撮影はメンバー自らが行き、この手法は、「ARCモデル」として世界各国に認知されつつある。このデジタル化による資源の世界規模の共有化は、当初、浮世絵を対象として展開(浮世絵データベースは、すでに約30万件のデータを収集)してきたが、現在は研究対象の広がりや技術開発の進展を反映し、絵本、版本のみならず、3次元資料(漆器・陶磁器・竹工芸を含む)など多数イメージを含むものへも応用が進展している。デジタル撮影をした所蔵機関は、アメリカではワシントンD.C.のフリア美術館、イギリスではロンドンの大英博物館とヴィクトリア&アルバート博物館、イタリアではヴェネチア東洋博物館とジェノヴァのキヨッソーネ東洋美術館、ローマのマレガ文庫、チェコではプラハのナールプステク国立博物館、国立美術館を含め、多数にのぼる。また平成23年度からは、マレガ文庫とフリア美術館で、国際ワークショップを実施するに至った。この「ARCモデル」の利点は、研究資源の世界的共有化より研究環境の改革をもたらした点ばかりでなく、この方式が海外でも採用・普及するにつれ、**研究者間の国際交流や日本文化研究の裾野を広げる一助**となった点でも特筆できる。即ち「ARCモデル」の合同作業やデジタルアーカイブ国際ワークショップにおいては、本拠点より派遣された研究者にデジタルアーカイブの技術指導を受けた現地の学芸員や近隣大学の若手研究者が、その地の資料のデジタル化・カタログングを実施する。こうした機会に、若手研究者が日本文化財の原物に触れ、また、現地の所蔵機関の学芸員より、そのハンドリングを実践的・インターンシッ的に学び、日本文化に魅了・学術的に触発されることとなる。その結果、上記所蔵機関や近隣大学の研究者が、アート・リサーチセンターへ客員研究員として長期滞在・研究するきっかけとなった。また、同センターで、平成23年2月に開催した「第1回デジタル時代の学芸員スキルアップ講座」の参加者を募集した際も、17名の応募者の内、14名が外国人という結果となり、本拠点の海外での知名度を如実に表す結果となった。

2) デジタル・ヒューマニティーズ(DH)に関する国際教育研究ネットワーク構築

本拠点は、DHを標榜する国内最大規模の研究機関として、国内外でのDH研究ネットワーク形成において主導的な役割を担ってきた。その活動成果の1つとして、DH研究機関の国際的な支援組織であるcenterNetを通じた、教育研究ネットワーク構築があげられる。本拠点設立時、centerNetには欧米を中心に200を超える研究機関、基金、企業が参加していたが、本拠点は日本で最初のメンバーとして参加した。

本拠点は、centerNet Summit(平成22年7月、於 ロンドン)に、文部科学省及び日本学術振興会の担当者と共に、アジア太平洋地区の代表として参加した。この会議で本拠点は、centerNet運営委員に加え、国際化と教育の推進機関として、DHコミュニティの活動を支える重要な役割を担うこととなった。その後、国際連携に関するエクゼクティブミーティング(平成23年12月、於 パリ)などに参加し、DHコミュニティの国際展開に関する方針決定に関わった。また、平成23年11月には、日本学術振興会に対して、米国・カナダ・日本の研究者と共同で、欧米におけるDH研究支援の枠組みを紹介し、参加提案を行った。さらに、平成23年にcenterNetが、DHに関する国際連携組織ADHO(Alliance of Digital Humanities Organizations)の構成メンバーとして承認された際、当拠点は、新体制における日本で唯一のfounding memberとなった。このように本拠点は、DHに関する卓越した教育研究拠点として国際的に認知されているだけでなく、今後も、世界全体のDHコミュニティの発展に対して継続的な貢献が期待される存在となっている。

3) アジア太平洋地域におけるDHネットワーク形成

本拠点は、欧米に比べて立ち遅れていた、アジア太平洋地域におけるDH研究の普及・発展のための枠組みを平成20年に提案した。その結果、本拠点に加え、武漢大学(中国)、台湾大学(台湾)、ソウル大学(韓国)、クイーンズランド大学(オーストラリア)が参加する国際的な教育研究ネットワークとして、**Asia-Pacific DH centerNetが組織化された**。その後、**本拠点が発起人**となり、上記大学のDH研究機関の代表を招聘した国際会議を本学で開催した。また、数々のDHに関わる国際学会の会議、DH2009、DH2010、DH2011、DADH学会(平成21年より国立台湾大学で毎年開催)、オーストラリアDH学会(平成24年3月、於 オーストラリア国立大学)では、学会期間中に上記メンバーが参加するミーティングを設定し、地域内のDHの教育研究に関する意見交換を行なった。このように本拠点は、当該地域内のDHコミュニティにおいて、リーダー的な役割を担ってきた。同時に、欧米と同地域のDHコミュニティの間のゲートウェイとしても重要な機能を果たしてきた。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

| | | | |
|-----------|----------------------|--------|-----|
| 機 関 名 | 立命館大学 | 拠点番号 | D11 |
| 申請分野 | 人文科学 | | |
| 拠点プログラム名称 | 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 | | |
| 中核となる専攻等名 | アート・リサーチセンター | | |
| 事業推進担当者 | (拠点リーダー名)赤間 亮 | 外 23 名 | |

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援について、本拠点は博士課程の充実に向けた大学の改革構想の中心的取組として位置付けられており、学内の大学院教育のありかたに大きな影響を与えている。事業の中核であるアート・リサーチセンターは、恒常的教育・研究機能を持つ研究所に改編されるなど、大学としての支援がなされている。

拠点形成全体については、大学の特色を生かした海外との連携が活発に行われ、若手研究者の約3分の1は外国人であること、また常時外国からの研究者が客員研究員として長期滞在していることなど、国際的な教育研究の場として十分に機能している。

人材育成面については、現時点までに21名が博士の学位を取得し、19名が大学や研究所に採用されており、学生の活動を中心に組まれたプログラムが上手く機能し、分野横断型の大学院教育プログラムなどによって充実した成果をあげた。

研究活動面については、京都という「地の利」を存分に生かしつつ、「デジタル・ヒューマニティーズの方法」による日本文化研究に取り組んでおり、アート・リサーチセンターによって確立されたデジタル・アーカイブ作成の手法（ARCモデル）は、大きな成果であると言える。一方で、工学系アプローチと文学系アプローチにまたがる研究領域であるにも関わらず、これら分野間の相互連関が見えにくい。

今後の展望について、本拠点は大学の特長を活かした事業を実施し、アジア太平洋地域におけるデジタル・ヒューマニティーズ研究のネットワーク形成に寄与した。また、京都という地の利を生かし、テキストベースではなくイメージをベースにしたアプローチにも日本独自の方向性が示唆されている。これらの取組は、今後の深化・発展が期待できる。